

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所基幹研究「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」2015年度第8回公開セミナー報告

タイトル：グローバル化するマサイ・イメージのつくられ方～マサイ自身による語り注目して～

日時：2016年1月28日（木）17時50分～20時00

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所マルチメディア会議室（304）

司会：荻谷康太（AA研）

講師：目黒紀夫（AA研）

コメンテーター：岩井雪乃（早稲田大学）

参加者：7名

内容：

今回のセミナーでは、AA研の研究機関研究員である目黒紀夫が、アフリカを代表する民族として世界的に名の知られているマサイのイメージの変遷と、今日のマサイ・イメージをめぐるマサイ自身の実践活動について講演をした。

マサイは20世紀末に東アフリカがヨーロッパ列強によって植民地化される過程では「好戦的な牧畜民」として恐れられ、植民地支配が進められる際に植民地政府は条約を結ぶこともしていた。20世紀の後半にケニアが独立しマサイを対象とする文化観光が白人観光客の人気を集めるようになる、そこでマサイは「未開」で「伝統的」なアフリカを象徴する役回りを与えられ、「文明」に属する白人は植民地主義的な舞台装置のもとでその歌や踊りを楽しんでいた。それから時代が下ると、マサイはたんに観光客に「未開」の歌や踊りを披露するだけでなく、観光客と手をつないで一緒に歌や踊りをするようになった。ここにおいてマサイは、「未開」や「伝統」であるのと同時に「安全」で「楽しい」存在としてイメージされるようになった。こうしたイメージは現在も観光の場で再生産されているが、世紀の変わり目を挟んで「野生動物の守護者」というイメージがグローバルに発信されるようになった。それはマサイを野生動物保全の望ましい／好ましい主体と見なす国際的な潮流の産物であり、より最近では、「伝統的」なマサイの文化・社会が「主体的」に「変化」しているとのメッセージが発せられるようになっている。その一方で、21世紀に入りマサイをブランド（知的財産）として確立しようとする運動が起こってもいる。それは「未開」「伝統」といったイメージをポジティブに捉えつつ、市場経済のなかで利益を得るためのマサイ自身のイメージ戦略である。

こうした講演内容についてコメンテーターをはじめとする参加者から出た論点としては、アフリカの諸民族のなかでもマサイは世界的な知名度の点で図抜けているけれども、それは歴史的にどのようなプロセスを経て確立されたものなのか、また、そうしたイメージを戦略的に利用することで何かしらの利益に与ろうとしているマサイは、地域社会のなかでどのような位置を占める

人物なのかといった点があった。マサイが有名になる過程については、南部アフリカに比べて東部アフリカでは「野生」が多く残された点、そうした東アフリカの中でも植民地支配の中枢に最も近く暮らしていた牧畜民がマサイであることなどが確認された。最近のマサイのブランド戦略については継続的な調査が必要ということで会場の一致を得たが、グローバル時代のアフリカ・イメージということでマサイはきわめて重要な民族であることが今回のセミナーを通じて明らかとなった。

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.